〈第150回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」
音楽評論：東条碩夫

ハイドン：交響曲 第103番 変ホ長調「太鼓連打」Hob.I:103

初演：1795年3月2日　ロンドン

ハイドン63歳、円熟のスケール感

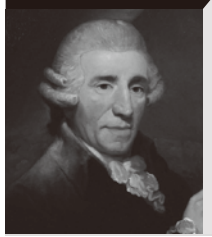
ほぼ30年近くに及んだハンガリーの大貴族エステルハージ侯の楽団の楽長の地位をひとまず辞し、自由な身になったハイドンは、今度は音楽家で興行師のヨハン・ペーター・ザロモンの勧めによってロンドンを訪れ、そこで新作の交響曲を数多く演奏、大成功を収めることになる。このロンドン楽旅は1790年暮から95年夏までの間に2回行なわれ、その中で「第93番」から「第104番」にいたる交響曲が英国初演された。いわゆる「ザロモン交響曲」12曲がこれである（もちろんそれ以前の旧作のいくつかも英国初演されている）。「第103番」は、1795年に作曲初演されたもので、彼の円熟の筆致を示す名作である。

「太鼓連打」（英語題名「ドラムロール」、独語題名「太鼓打ちを伴った」）というニックネームは、第1楽章の序奏冒頭でティンパニが1小節間、フェルマータ（延音）付のドラムロールを行なうところから生まれたものだ（最近ではティンパニがアドリブで自由に、豪快なソロを聴かせる演奏も多い）。この印象的な序奏は、同楽章終結直前にもう一度現れる。

快活な第1楽章に続き、第2楽章は民謡的な雰囲気を持った親しみやすい旋律で人気がある。第3楽章（メヌエット）の主題は、モーツァルトの「魔笛」の、口枷をはめられたパパゲーノの歌を思い出せるだろう。再び快活な第4楽章に入り、曲は怒涛のように進んで行く。

楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

作曲家プロフィール



フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

Franz Joseph Haydn 1732-1809

オーストリア北東部のニーダーエスターライヒに生れ、ウィーンで世を去った古典派の大作曲家。1761年ハンガリーの大貴族エステルハージ家の楽団の副楽長に就任、次いで楽長となり、途中数年間の中断を経て1804年までその地位に在った。100曲以上の交響曲をはじめ、室内楽、独奏曲、声楽曲など、作品は多数にのぼる。若いモーツァルトとは親交があり、またわずかの間ベートーヴェンをも教えたことがある。円満な性格の人物でもあった。

松下 功：和太鼓協奏曲「飛天遊」

初演：1994年7月30日　東京

松下功と林英哲の共同作業

和太鼓と西洋のオーケストラとを組み合わせた作品には、例えば1976年にボストンで小澤征爾の指揮と、和太鼓グループ「鬼太鼓座」により初演された石井真木の「モノプリズム」などの前例がある。だがここに聴く「飛天遊」は、当時40歳代に入ったばかりの松下功が1993～94年に作曲、現田茂夫の指揮する新星日響がサントリーホールで初演した曲だ。各国で演奏される機会も少なくない。松下の代表作である。

そして、前者の初演の際には「鬼太鼓座」の一員として参加していた林英哲は、「飛天遊」の初演ではソリストとなって和太鼓を演奏していた。その彼が、今回の演奏にも加わることになっている。彼は、日本国内だけでなく、各国でのこの「飛天遊」の演奏の際にもソリストを務めている。緩やかに叩き出される曲の冒頭部分から狂乱のクライマックスに至るまで、林の豪壮な大太鼓や締太鼓の演奏が聴きものである。

なおこの「飛天遊」は、2000年にベルリンのヴァルトビューネ（野外コンサート）で、ケント・ナガノ指揮ベルリン・フィルにより演奏され、満員の聴衆を熱狂に巻き込んだことでも話題を集めた。因みにこの曲には、ベルリン芸術祭の委嘱を受けて作曲された和太鼓と八重奏による室内楽編成版もあり、こちらの方は1993年9月にベルリンで初演されている。

作曲家プロフィール

松下 功

Isao Matsushita 1951-2018

東京に生まれ、同地で他界した作曲家。東京芸術大学副学長、日本作曲家協議会会長、アジア作曲家連盟会長、「アジア音楽週間2000in横浜」実行委員長、「ながの音楽祭2000」音楽監督など音楽界の公職も歴任し、楽界からも敬愛された。主な作品には、オペラ「遣唐使」、長野冬季五輪（1998年）のために作曲したオペラ「信濃の国・善光寺物語」、同じく開閉会式選手入場音楽「信州民謡パラフレーズ」、室内楽曲の「東風」、「時の糸」（3輯）ほか。

楽器編成	独奏和太鼓、フルート3（ピッコロ、アルト・フルート持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネア・ドラム、タムタム、ボンゴ、テンプルブロック、シロフォン、ヴィブラフォン、弦楽5部

R.シュトラウス：交響詩「英雄の生涯」op.40, TrV190

初演：1899年3月3日　フランクフルト

「英雄」とはだれのこと？

若い頃のR.シュトラウスは、優れた交響詩をいくつも作曲した。その多くは、特定の人物を主人公にし、その性格や行動を描いた作品である── 理想の女性を求めて遍歴するドン・ファン、野心ゆえに破滅するマクベス、破天荒ないたずら者ティル・オイレンシュピーゲル、ニーチェが創作した超人ツァラトゥストラ、夢想家で冒険家のドン・キホーテ‥‥。

これらは、いずれも一種の英雄的な存在とも言える主人公たちではなかろうか。強烈な個性を持った、並外れた性格の人物たちである。シュトラウスはそういう者たちを作品の題材としていたが、その路線の行き着くところ、彼はなんと、ついに自分自身を英雄と称して、それを主人公にした交響詩をつくり上げてしまった。それがこの「英雄の生涯」なのである。一種のジョークと言えるかもしれない。作曲は1897年から98年にかけてであった。

シュトラウスは、この壮大な作品をもって、交響詩の路線から手を引き、オペラの作曲に転進して行く。このあとに彼が書いた大規模な管弦楽曲は、わずかに「家庭交響曲」と「アルプス交響曲」の2曲だけであった。

熟練の管弦楽法、巧妙極まる描写

第1部「英雄」

冒頭、ホルンと弦楽器群により力強く快活に立ち上がる主題が「英雄の主題」である。変ホ長調という調性は、あのベートーヴェンの「英雄交響曲」に因んだものという説もある。これが堂々と展開されて行き、それがやがて最強奏のフェルマータで一段落すると──。

第2部「英雄の敵たち」

木管楽器群に現れる細かく慌ただしい動きと、テューバなどに現れる陰鬱なモティーフ。これが「英雄」に難癖をつける敵たち（例えば批評家のごとき者たち）である。「英雄」は低音楽器（チェロ、コントラバスなど）で不機嫌に対応し、ついには毅然として敵たちを払い除ける。

第3部「英雄の伴侶」

突然出現した伴侶（ヴァイオリン・ソロ）に驚き、振り向いたかのような「英雄」。この対話はかなり長い。やがて曲は官能的な陶酔の部分に入り、豊麗な音楽が続く。シュトラウスが得意とした曲想である。

第4部「英雄の戦い」

遠くから微かに「敵たち」のざわめきが近づく。金管のファンファーレが戦闘の開始を告げた。「英雄」は今や決然として闘いに赴く。20世紀の映画音楽にまでその影響を与えた激しい戦闘の音楽である。やがて曲は「英雄」の勝利を描く部分に入り、「英雄の主題」が堂々と再現する。

第5部「英雄の業績」

ここで語られるのは、「英雄」──つまりシュトラウス自身の業績である。彼のこれまでの作品、「ドン・キホーテ」「ドン・ファン」「死と浄化」「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」「ツァラトゥストラはかく語りき」などの断片が走馬灯のように、精緻な対位法の中で流れて行く。

第6部「英雄の隠遁と完成」

曲はいよいよ静寂に向かい、安堵感と諦念を増して行く。時に紛れ込む「敵たち」の雑音や妨害なども、もはや一時のものでしかない。あの「ドン・キホーテ」のそれにも似た牧童の笛が安息の気分を醸し出す。全曲の終結個所では「英雄の主題」の骨子である上行音型がトランペットに現れるが、これは「ツァラトゥストラはかく語りき」の「自然の主題」を連想させるかもしれない。こうして全曲は、弦楽器を除く全管弦楽による壮大なクレッシェンドとディミニュエンドで結ばれて行く（因みに初稿では、この部分は静かに終結する形になっていた）。

楽器編成	フルート3、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、E♭クラリネット、バス・クラリネット、バスーン3、コントラ・バスーン、ホルン8、トランペット5、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テナー・テューバ、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、テナードラム、スネア・ドラム、タムタム、トライアングル、ハープ2、弦楽5部

作曲家プロフィール

リヒャルト・シュトラウス

Richard Strauss 1864-1949

ミュンヘンに生れ、バイエルンのガルミッシュ＝パルテンキルヒェンに没したドイツ音楽史上最大の作曲家のひとり。20代から30代中盤にかけ作曲した交響詩で名声を博し、それ以降はオペラの作曲に転じ、「サロメ」「エレクトラ」「ばらの騎士」「アラベラ」「影のない女」などの名作を残した。その一方、ミュンヘンやベルリン、ウィーンなどの歌劇場の指揮者や芸術監督、帝国音楽部会総裁などの公職も歴任し、ドイツ音楽界の重鎮として活躍した。